

キリスト教神秘主義者の信
仰における病いと救いにつ
いて

小泉友美 Koizumi Tomomi



目次

Armelle Nicolas アルメル ニコラ (1606-1671) 燃えあがる聖心	1
---	---

Armelle Nicolas アルメル ニコラ (1606-1671) 燃えあがる聖心

Armelle Nicolas アルメル ニコラ (1606-1671) はホームメーカー (家政婦) 達より信仰される、民間信仰における聖女であり、フランスブルターニュの生まれ故郷で羊飼いや家事手伝いをして生計をたて暮らしていたが、できるだけ神聖なものに属さないものには近づかないようにして、祈りの道に入りました。

実の兄は、森の中で旅人を襲撃して持ち物を奪う盗賊となり、アルメルの魂の悩みの元となりました。

その霊的暴力試練体験において、身体中が燃え焦がれてゆき、高熱、体内の出血、手足の痺れ、狂気、崩壊を経験しました。

死後、多くの人々が枕元に集まってその死を悼み、国王さながらに、心臓を抜き取られて聖遺物として、聖堂内の柱の奥に埋められました。

この作品は、Le triomphe de l'amour divin dans la vie d'une grande servante de Dieu nommée Armelle Nicolas (Vannes, 1672 刊行) より着想を得ました。

一匹の子羊が犬に追われて甲高い声をあげた。段々に重なり合っている谷間に、こだまはかえり、かえり、アルメルの意識は現実へと戻された。そのしずかなる朝の祈りは、組み合わせれた真っ白な両掌に、冷たい朝露が滴り落ちて、言葉も足元の水流へと混ざり合わさってゆく。

腰かけている黒い花崗岩のドルメンは、アルメルのお気に入りの場所で、目を閉じて黙想すると、いつの間にか過ぎ去る時を忘れてしまう。

群れから離れて逃走する羊を追いかけて、こちらへと戻って来る犬を跪いて抱きしめると、地平線の向こうには、夜が忘れ残した、いまだ光輝いている金星と、あまたの星々が燦々と降ってくるよう。

先程の逃走で、びっことなって片足をひきずっている羊は、群れのなかにしっくりとなじむことができずに、アルメルに虚ろな眼差しを投げかけている。ふと、行き場を同じく無くしてしまった兄のことを思い出した。もともと生まれついて気性が激しく、静いばかりしており、羊飼いは嫌だと村を抜け出して、森の中で出会う旅人達の荷物を奪い、行きあたりばったりの生活をして、最後にアルメルの前に現れた兄の姿は、ぼさぼさの伸ばし放題の長髪に、茨の棘にかき裂きとなった衣を纏って、不平不満の怒りに燃えた目を向けたが、妹の穏やかな存在にその暴力のころは癒されてゆき、鮮やかな笑顔を見せて、強く抱擁するままに、暗い森へと戻って行った。

不在の兄の、その強い、暖かな抱擁はくっきりとアルメルの魂に刻みこまれた。

アルメルにとって、生まれてはじめて知る人間の弱さの体験であった。

自分よりも筋力逞しく、背が高い兄は、何故ゆえに尊厳を失った、ボロ切れのような存在に変身してしまったのか、哀しみにこころを失った。

この目の前のおどおどした羊に、失われた兄の姿が重なり合って、アルメルはふと、羊を追う仕事をやめたくなった。家族の不満を覚えながらも、村を出て家事手伝いをして様々な家に出入りして生計を立てた。

まだ若いゆえに、家人から時折祭りごとに誘われていても、その高まる音楽、人息のむんとした熱狂、大声は心身を疲れさせて、静やかで狭い屋根裏部屋で、一人静かに祈りを捧げることを好んだ。

読み書きは出来なくても、女主人から贈られた細密画の鮮やかなキリストの生涯を目と指で追ってゆく。

藍色の天上から降りた天使による受胎告知、紅色の香油をキリストの足元に滴す、罪深き女の纏った、長いマント。濃紫色の聖杯を上へとかざして、使徒達が集う最後の晩餐。

この極めて鮮やかな、色とりどりの声なき信仰はアルメルをさらなる、深き祈りへと導いていった。

罪などその身にまだ覚えが無いが、突然に極めて破壊的で、暴力的な苦難のキリストの十字架の映像が胸にめらめらと燃えあがった。それは激しい愛である。全地は暗く、空の太陽は光はまったく失っていた。ふと、口元に酸い葡萄酒を満たして、頭を垂れて息を引取られたカミのように、アルメルが手で触れるもの、眺めるもの、語ることがすべて、骨、血液、血管のすべての臓器が炎と化していった。

燃えあがる炎と一体化してゆくこのはじめての体験は恐れさせ、驚かせ、言葉を失わせた。苦しんでいる肉体と精神を、炎として捧げるということは、人生の最後まで貫いてゆく、なんという精神的な報いなのであろうか？アルメルは、まことに苦痛がある度に、その過酷さが長びくために、精神的と肉体の屈辱を味わさせられるために、衰弱してゆき、なにかしらまた、他の人に手を差し伸べたいような、優しいところが生まれてゆく。この1回目の経験の後、続々と心身を燃えあがらせる神との合一のエクスタシーを受け入れた。愛のために内より燃えあがってゆく心臓は、誠なる猛火であり、なんと激しく、熱く、台所仕事をしている時も、口や唇は潤いがすっかりと無くなって、かさかさ乾燥してしまい、こもった熱はいかなる水によって癒されることは無く、唯一、聖体を受けるためのキリストの血によって慰めを得られてゆく。

なんと激しい体験は、アルメルを黒焦げにして苦しみを与え、キリストの身体によって安らぎと微睡みを与えてくれる。キリストの身体を口に受ける時に、すべての心身感覚の甘き微睡みを感じることが出来、まるで最愛の使徒聖ヨハネが師の胸元に安らかに頭を預けるように、黙って、どのようなころのどよめきも、動作もない。「枝の主日」には、まる一日中、十字架の受難を激しく全身に受けるままに、剣で突き刺されるような鋭い痛みを覚えて、燃え盛る炎が胸を貫いて、少しずつ炎が頭上より足元に下っていった。あまりの激痛に、アルメルは立っていることが出来ずに、床に寝付くしかなかった。けれども、眠る傍ら、その床も熱い炎で焦げつかされて、一睡の眠りも許されずに、骨の髄まで粉々になってゆく。

少しずつ壊されてゆく感覚は、どのような名称もない病気に侵されていった。薬を飲ま

ずとも、そのとてつもない病みの痛みは、いつの間にか消え去ってしまっている。身体の内側からの昂ぶる高熱、体内の出血、手足の痺れが魂を極度に緊張させて、その痛みと心身障害を通して苦しみと愛のキリストに同一化させてゆく。その悶えの後、新鮮な空気を求めて、繊細な純白な花を咲かせて、実に細やかな火花のような丸い花輪に触れるままに、雨降る時は湿やかな濃い霧に身を纏って、透き通る水面を覆う深い緑の藻を静かに眺めると、その激しく燃え盛る炎はなだめられてゆき、内にも外にもその激しい動揺は現れなくなった。この神聖なるカミを求める狂気に取り憑かれるままに、いたる所に探し求めて、その名を呼び、森の中を彷徨って、太い幹に抱きついてこう問いかける。「どちらに最愛の主はおられるのですか？ どちらにお隠れになられたのですか？」

激しく、嗚咽する。

神の名を口ずさみ、探し求めて歩を進めても、突然また、その安心はなくなって、神より見捨てられた境地に至って、攻撃的な悪魔に憑かれ、襲われる。この誹謗中傷の暴力、カミをも嘲るころ、十字架や、あんなにも惹かれた聖画への憎しみがふつふつと生まれていって、癒された聖体にも嘔吐が湧き上がるままに、なんにも無気力となり、なにも感じられなくなり、涙は乾ききって、一滴も流れなくなって、からからに乾ききった両瞳、がちがちにこわばった肉体はとげとげしい。日夜、激しい憎悪の念や、汚らしい言葉が耳を襲って、朝起きると、青痣だらけもなっている両腕、すべての全身の骨や、筋肉、関節ががくがくに外されて、7日月間にわたってこの苦しみが絶え間なく続いていた。

ある日曜日の夕暮れに、痛みを全身に覚えながらもこころのの休息を求めて、夕べの祈りに参加した時、さらにまた全身の筋肉が硬直してゆき、顔の表情がひきつって、真っ黒焦げとなった脳髓が目の前に引き出されてゆく幻覚に落ち入って、酷い悪臭で覆われた。この耐え難い心身の拷問の後、再びカミによる恩赦の愛がアルメルの上に返って来た。

アルメルはいたる所に神聖なるカミの愛の炎を求めてゆき、昼も夜も、カミの愛の元に休め、共に結びついた。濃く深く、さみしい陽の光が届かない森林の沼地に、絶望と嘆きを通して、この悲惨な状況から解放してくれる。極限な苦しみにおいても、どうにか喜ばらしきものを見つけ出して愛によってまた死んでゆくよう。こうして、まったく何も出来ない息も出来ない状態へと堕ちてゆき、真っ青になった死人のように倒れゆくまま。まるで、神ののみによって生かされてゆくことを、あらためてこの放棄の修練において感じさせてくれる。

しかし、この様々な暴力的試練においても、アルメルは暗黙の了解の元に、魂の使命により導かれて、完全を求めて、その中で、若々しい気持ち、打算のないころを持って生きてゆくことが出来る。

アルメルのところはすでにおのれの為には無く、生きてはおらずに、ただひたすらにカミのみに生きるのみ。

「私には2つの目と2つの耳があり、左の目、耳は仕事の為に使われ、右側の目と耳、このころはカミの為に」

この崩壊、おのれをうしなつてゆくこと、存在することにも答えを得る事が出来ないこと、そして、すべてのエクスタシー。

その変化の訪れは、突然にやって来た。おそらく、いのちの間近であろうか、心身ともに衰えを覚えて、いつもの森への小路の散歩にも、すぐに動悸を覚えて、歩を進めるこ

とが難しい。静かに、何も望みたくなかった。仰ぎ見た葉脈の折り重なりからの眩しい光は、闇と光という対象的なもののなかの事象。

何も受けることなく、何にも捧げることなく、ひたすらに諦めを受けることにした。

ただひたすらに沈黙であり、不動な動きのみ。これは真の放棄による回心であって、やがてアルメルは感情の動きを無くしてしまった。海面に流されてゆくままの、漂うままの油に押し流されてゆくように。

アルメルは、わずかながらに残された、その若々しい澁刺とした感動、喜びを1本、1本摘んでゆき、大きな花束にして、背後の彼方へと放ってしまった。

「前へと、後を振り返ることなく。」

アルメルはこうして家政婦として働いた生涯に、苦しみの中でも笑顔を絶やさずに、辛抱強さと優しさを忘れずに、誰に対しても怒りと憎しみを持って接すること無く、信仰心を昇華させてゆき、亡くなった翌日には、多くの人々が枕元に訪れて、花束に埋もられて、懷から小さな布を取り出して、流れ出た血液を拭って、または小さな骨の欠片を大切に聖遺物として、持ち帰った。そして、アルメルの心臓はイエズス会士によって抜き取られて、瓶の中に丁寧に入れられて、秘宝のように聖堂の柱に埋められた。

キリスト教神秘主義者の信仰における病いと救いについて

著 者 小泉友美 Koizumi Tomomi

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
